

二〇二五年度（令和7年度）

横浜女学院中学校

D 入学試験問題

令和7年2月2日（午後）

国

語

注意

- 1 指示があるまで開けないでください。
- 2 問題は、20ページあります。
- 3 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 4 時間は50分です。

受験番号

氏名

— 次の文章の——線①～④のカタカナを漢字に、漢字をひらがなにしなさい。また、文章中の漢字の間違まちがいを1か所ぬき出し、正しい漢字に直しなさい。

オリンピックは、古代ギリシアにキゲン^①を有するスポーツの祭典を、一八九六年にギリシアのアテネで復活させたスポーツの総合大会で、四年に一回開き^②いされている。世界中で愛されている五輪^②のマークは、「近代オリンピックの父」と呼ばれているクーベルタン男^③しやくによつて考案されたものである。マークに再用されている赤・緑・黒・黄・青の色は、地色の白を加えること^③で、全世界のコッキ^③を総じて描くことが可能であるという理由から選出^④された。オリンピックを主とする組織IOC（国際オリンピック委員会）は、すべての国にオリンピックへの参加を呼びかけている。また、宗教・人種・政治的思想によつて特定の国や選手に対し差別をすることを厳禁としている。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(字数制限のある問いは、句読点や記号も1字に数えます。)

「ねえ、佐々木ささきの願いごとってなんだったの?」

学校から数分歩いて生徒の I から遠ざかったのを確かめると、私は佐々木の横に並んだ。

「願いごと?」

佐々木は歩く速度をゆるめると、私も入るように傘かさを差しました。

「賭かけに勝かつたら、一つ願いごとを叶かなえてって言ってたじゃない」

「そっか。そんなことを言っていたのか」

「今日の朝の話だよ」

私が言った。

「願いごとねえ……」

佐々木は首をひねった。

「ないの?」

「うーん。あ、あるある。今できた。会社早退したこと里子りまさんに黙だまっていて」

佐々木の即席願ねがいごと①に私は顔かほをしかめた。

「黙だまっていてもなにも、こんな時間に二人で帰かえったら、母ははさんに怪あやしまれるよ」

「そっか。だったら道草しよう」

「道草？」

「そ。道草。氷を食べて帰ろう。百万※2のオプションとして奢おごるからさ」

賭けに負けた佐々木の願いを叶える必要はなかったけど、おかしな男と結婚けっこんしたことに気付いて、母さんが悲しまないよ
うに、私は誘さそいに乗ることにした。

「氷ってこの辺に食べられるところあるかな」

佐々木は誘って置いて無責任なことを言った。

「知らないよ」

「まあどこでも氷ぐらい出してくれるか。もうすぐ夏なんだから」

「どこでもって……。私、この近辺でかき氷食べた記憶きおくないよ」

私の住む町はすつきり片付いていて、駅の周りにしか店がない。他は住宅が規則正しく並んでいるだけだ。生まれたとき
からずっとこの町にいるけど、駅前でしか物を食べたことがない。

「大丈夫だいじょうぶ。うろろうしてるうちに適当な店が出てくるさ」

佐々木が言った。いつもそうだ。行き当たりばったりでその場のぎで。私は時々そんな佐々木に不安になった。その能
天気さにいらだった。佐々木という一瞬いっしゅん一瞬は、それなりに楽しかった。でも、佐々木とは一瞬一瞬を過すごすだけでは済
まない。

氷を食べられる店を捜し始めた私たちはあちこちの路地にむやみやたらに入り込んで行き止まり、何度も同じ道に出くわした。

「この道さつきも通ったよ」

「じゃあ、今度は右側通行で歩こう」

1 足を進めれば進めるだけ、知らないものを見ることができた。自分の家から歩いて行ける範囲にも見たこともない景色がある。それはちよつとした感動だった。ただ、その感動以上に私の足は疲れてきた。

2 うんざりしながら足を進めていたけど、不思議なことに丁寧ていねいに歩けば、それなりにいろんなものが見つかった。今まで存在すら知らなかった小さな文房具店ぶんぼうぐてんや、どこかの奥おくさんが趣味で始めただけで売上げの全くなさそうな可愛い絵本屋さんがあった。誰だれが面倒めんどうを見ているのか弱そうなあじさいがたくさん植えられた空き地があつて、きちんと世話の行き届いたきれいなお地藏さんがあつた。

3 そんな幅はばのある道じゃないから、どこを通ろうと一緒いっしょだ。私はわざとらしいため息を何度もつきながらも、佐々木に従って歩いた。

4 佐々木は私が何かを見つけ足をとめるたびに、ぴったりのタイミングで「な」って嬉しうれそうに言った。まるでそこにあるのを知っていたみたいに。私は何だか悔くやしくて、「だからどうしたのよ」って顔をしてみせたけど、本当はびっくりした。うっかり「すごいね」って佐々木に言ってしまうそうになるくらいに単純おどろに驚いていた。

「ねえ、もういいじゃん。帰ろう」

足が痛くなりだして、私が言った。学校帰りに遠回りはさすがにきつい。

「もうちよい。もう少しで見つかりそうな気がする」

佐々木が言ったけど、それは気のせいだ。

「だったらバス乗って、駅前まで出たほうが早いよ。駅前の喫茶店きっさてんだったら、たぶんかき氷あるから」
私がせっかく提案してやったのに、佐々木が却下きやつかした。

「それじゃあ、今まで歩いた時間がむだになるじゃん。今、駅に出ることは負けを認めたも同然だよ」

「誰に何の負けを認めたのよ」

「さあ」

佐々木は自分で言っておきながら首をかしげると、また歩き始めた。

「もう歩きたくないって」

私は佐々木の背中に向かって言った。

「大丈夫。歩けるって。早季さきこ子ちゃんは自分で思うよりずっと歩けるから」

「何よ。その訳のわからない理屈りくつは。だいたい私が賭けに勝ったのに、どうしてこんなしんどい思いしなくちゃいけないの」

ぶつぶつ言いながらも、私は佐々木をうまく説得できず、ふたたび家の近辺をぐるぐる歩いた。

「どうなんだろう。わからないや。好きだと言いつけるほど、早季子ちゃんのこと知らないから」

私が中学校に入る前、つまらないことで佐々木と言いつけた時のことだ。

「私のこと嫌いなんだろう。正直に言えよ」

私が言つたら佐々木がそう答えた。

正直に言えとは言つたものの、好きだと言いつけられなかった佐々木に私はショックを受けた。その頃には佐々木が父親になるだろう予感はしていたから、佐々木のいい加減な態度が頭にもきた。

その後、私は家を飛び出し、もちろん、母さんに怒られた佐々木が私を探しにきた。しかし、その時の佐々木がまたひどかつた。

「頼むから、帰ろうよ。里子さんに怒られるからさあ」

「どうしたらいい？ 好きだと言えよよかったのかなあ。でも早季子ちゃん僕のこと好きでもないだろう。そんな相手に好きって言われても仕方ないじゃん」

佐々木の言葉は私をどんどん嫌な気持ちにさせた。結局私たちは和解することはなく、佐々木の最後の手段は、私にスニーカーを買うという情けないものだった。

「あ、あつた！」

「そういえば！」

佐々木と私がほとんど同時に叫んだ。

そう、あのけんかして私が飛び出して、佐々木がひどいことをいっばい言った恐ろしく気まずい家への帰り道。私の先を行ったり後ろに回ったりしながら歩く佐々木が「氷」と書かれた喫茶店の幟のぼりにぶつかった。ひらひらの幟にぶつかつてよける佐々木に私は泣きたくなかった。あまりに頼りなくいい加減で、全く解げせなくて。その時の私が佐々木のことであわわっていたのは、母さんのことを愛しているらしいということだけだった。

「どこだったっけ？」

「覚えてないなあ。佐々木は？」

「僕も覚えてないよ。あの時は早季子ちゃんをなだめるのに必死だったから」

「私だって、怒ってたもん」

そう言いながらも、

II

そう、児童公園を抜ぬけて真っ直ぐ行って細い裏道に入ったら、三軒さんけんほど店が並んでいる。散髪屋さんぱつやさんとつぶれた八百屋やおやさん、そして喫茶店だ。

目的が見えずに歩いていていた時とは全く違ちがって、私たちの足取りはすっかり軽く、さっきまでの三倍近い速度で進んだ。散髪屋さんも八百屋さんも閉まっていたが、鄙ひなびた喫茶店はちゃんと開店していた。

私は喫茶店に入ると、並んで座った。三つの小さなテーブルとカウンターしかない店。電灯うすぐらも薄暗く、古めいてはいた

が、掃除は行き届いていてきれいな店だった。

「えっと、氷イチゴ二つ」

佐々木はお絞りとお水を持ってきた愛想のない店の主人にそう言った。

「ちよっと、なんで私の分まで勝手に決めるのよ」

私は何の断りもなく、氷イチゴを頼んだ佐々木に膨れた。

「だって、あとミルクとみぞれとレモンだよ」

佐々木はイチゴを選ぶのが当然だといわんばかりに言った。実は、私もイチゴが好きだけど。

「そうだけど、失礼じゃん」

「いいじゃん、結局は蜜に色ついているだけでみんな同じ味なんだから」

佐々木はそう言って笑った。私も怒っていたのに、なんだか笑えた。

今年初めてのかき氷は、細く削られた淡いピンクで、舌の上で一瞬にして跡形もなくなった。まだ夏になりきっていない

私の体はたった一杯の氷イチゴで完全に冷やされてしまった。佐々木とけんかして飛び出したあの時の記憶も、百万円のオプ

ションとして歩き回った今さっきの道のりも、氷イチゴと一緒に私の体にしっかりと溶けてしまった。

氷を食べ終えて外に出ると、天気は良いのに、さっき食べた氷のような覚束無い雨が降っていた。

「あ、雨?」

見上げた私の顔の上に真つ青な空から柔らかい雨粒が落ちた。

「ほらね」

佐々木はそう言つて黒い傘を広げた。

(瀬尾まいこ『図書館の神様』より)

※1 賭け…母の独自の天気予報が当たるかどうか、私と佐々木が賭けている。

※2 百万…佐々木が賭けに負けた場合、私に百万円を払うことになっている。

問一

I

(2行目)に入る語として最適なものの中から1つを選び、記号で答えなさい。

ア 谷 イ 陽 ウ 土 エ 沼ぬま オ 波

問二

——線①「私は顔をしかめた」(13行目)とありますが、なぜこのような表情になったのですか。その理由を次の文の空欄くうらんに当てはまる形で10字以内で答えなさい。

「私」の質問に対して () () のような回答が返ってきたから。

問三 指定か所の **1** (35行目) ~ **4** (45行目) の段落を並び替えたものとして、最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 1 ↓ 3 ↓ 2 ↓ 4

イ 1 ↓ 2 ↓ 4 ↓ 3

ウ 2 ↓ 4 ↓ 3 ↓ 1

エ 3 ↓ 2 ↓ 4 ↓ 1

オ 3 ↓ 2 ↓ 1 ↓ 4

問四 ——— 線② 「その時の佐々木がまたひどかった」 (68 ~ 69行目) とありますが、どのようにひどかったのですか。その時の様子を40字以内で答えなさい。

問五

II

(86行目) に入る文として最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 怒りがこみ上げてきて思い出すことができなかつた。

イ 私の記憶は少しずつ晴れてきた。

ウ 佐々木のあとについていくことにした。

エ 怒っていたこともよくは覚えていない。

オ 当時の佐々木のことを許していた。

問六 —— 線③「氷イチゴと一緒に私の体にしっかりと溶けてしまった」(104行目)とありますが、このか所の説明として最

適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 氷イチゴを食べたことで、これまでにあった佐々木との不和については目をつぶり、新たな関係を築こうとしているということ。

イ 氷イチゴを食べたことで、ここまで歩いた疲れを忘れ、佐々木のいらつく言動も受け入れられるようになったということ。

ウ 氷イチゴを食べたことで、学校帰りに長時間歩き暑さや疲れで限界を迎えていた身体が癒され、家まで帰る気力を取り戻したということ。

エ 氷イチゴを食べたことで、佐々木のがままに付き合わされたことへの不満はすっかり忘れ、気分良く家に帰ろうとしているということ。

オ 氷イチゴを食べたことで、佐々木との不仲や今日一日の疲労などすべてが解消され、彼のことを見直すきっかけになったということ。

問七 本文の内容として適当でないものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 佐々木は会社を早退したことを母に怪しまれないためにも、氷を食べて帰ることを私に提案し、私は仕方なくその誘いに乗った。

イ 私の住む町は駅の周辺にしか店はなく、それ以外の土地では規則正しく住宅が並んでいるだけなので、私は駅前以外で物を食べたことがないと思っていた。

ウ 学校帰りに氷を食べられる店を探し歩き続けていたが、佐々木の方角感覚があまりにもないのが原因で同じ道を行ったり来たりしていた。

エ 以前私と佐々木は何気ないことから口論となった時、佐々木が私のことを好きだと断定しなかったことが引っかかっており、結局解決しないままうやむやにされた。

オ 道草の結果私と佐々木が見つけた喫茶店は、古風な印象で細かいところまで掃除されているきれいな店だったが、店主は素っ気ない態度だった。

問八 〓線「佐々木」（1行目）とありますが、私から見た佐々木の印象として、最適なものを次から1つ選び、記号で

答えなさい。

ア その時々で一緒にいることに対して楽しさを感じることもある一方で、おざなりな対応や言葉には終始怒りをおぼえている。

イ 自身の発言に責任感がなく、いつも後先考えずに思いつきで行動するため、振り回ふされることにあきれている。

ウ 母さんが気づいているかはわからないが、言動が変わっているうえに、そのいい加減さに振り回されてばかりでも迷惑めいわくだと思っている。

エ 時間をともにしていく中で楽しい瞬間もあるが、安直で計画性のない言動に不安やいらだちを感じることもある。

オ 行き当たりばったりで能天気な様子に怒りを感じることもあり、母の二度目の結婚相手でなければ受け入れることができないと思っている。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(字数制限のある問いは、句読点や記号も1字に数えます。)

哲学ていがくというのを見たところおもしろくないものです。これから「君たちはどこにいるのか？」とか、「哲学入門」という

タイトルで話をするようになっていますが、^⑦哲学に何か期待していても、眠ねむくなってしまいかもしれません。

実は、私も哲学を勉強したわけでも、哲学を教えているわけでもありません。大学で教えているのは、主として「グローバルスタディーズ」という科目です。でも、その基になっているのが哲学的な考え方なんですね。

「グローバリゼーション」という言葉をよく耳にしますが、^④これは一般いっぱんには、地球全体がひとつの世界になり、そこに人間も物も、あるいは情報も一挙に流れる、^⑤そういう状況じょうきょうのことを指しています。たしかにグローバリゼーションは、私たちの生活環境や人間が生存している条件といったものを、^②根本的に変える現象げんしょうです。

では、そのグローバリゼーションによって何が⑥変わったのか？ あるいは変わったことで、我々の生活あるいは生存の条件はどうなるのか？ そのようなことを総合的に考えるのが、グローバルスタディーズです。

このようにグローバルスタディーズは哲学ではありません。^③哲学ではないのですが、しかしこれを進めてゆくには、実は哲学的な発想はつしやうが重要になってきます。

哲学は、冒頭ぼうとうでも述べたように、一見つまらなくて役に立たない学問です。哲学者のカントは、「あらゆるものには値段がつく」と言っています^④が、役に立つから価値がある、したがってその分だけ値段がつくということなのです。

ところが、稀まれに値段がつかないものがある。役に立たないものもそうですが、逆にそういうものには「尊厳そんげんがある」とか

ントは言います。尊厳というのは、文字どおりには「尊くとうと厳かなこと」というわけですが、これはお金では買えません。買えないし、何かに使おうなどと思っても使えないでしょう。

この尊厳があるかないかによって、何かが根本的に異なってきました。哲学に尊厳があるかどうかはわかりませんが、哲学は役に立たない、けれども、ないと困るというものでもあるのです。

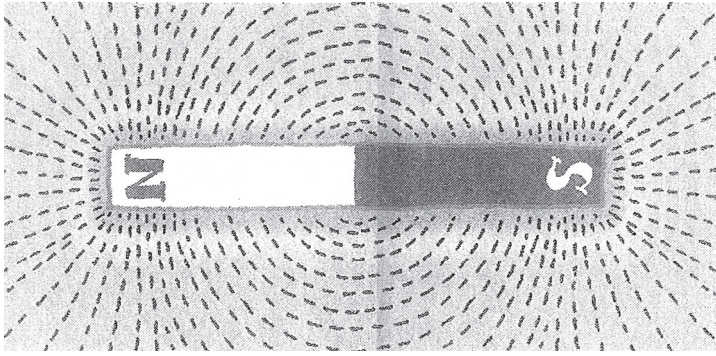
③ 学問というものは、ある領域、あるいはある物、現象といったものを対象とし、それを研究します。例えば、一八世紀から一九世紀にかけて「経済」という現象がヨーロッパで重要なものとして浮うかび上がってきました。

当時のヨーロッパでは、さまざまな物をつくって売り、あるいは市場で物が売り買いされ、利潤りじゅんを得て、さらにその利潤を回し、これをさまざまなかたちで使うという活動が重要になってきました。経済学というのは、このような活動が市場とおしてどのように機能するのといったことを研究する学問として生まれてきたのです。

同じことは理科系の学問でも言えます。例えば電気という現象が発見されると、それを対象としたひとつの研究領域ができる。あるいは、こちらの方が先ですが、物質や重さ、質量といったものの働き、さらにその成り立ちがどうなっているのかということの研究するのが、すなわち物理学となります。また、いわゆる化学反応といったレベルで起こる事象を対象としたものが「化学」という学問になるわけです。

□、あらゆる学問には扱あつかう対象があります。その対象に関わる領域、それがひとつの学問の領域になります。

だから学問というのは、基本的に「知る」という在り方に対応して形成され、必ずその対象があり、対象領域に規定されて一つの学問として、体系として成立するものです。



鉄粉が描く模様 (イラスト たむらかずみ)

ところが、哲学という学問には特定の対象がありません。対象がないというよりは、むしろ対象を限定しない、と言ったほうがいいでしょう。

学問というのは、前述したように「ものを知る」ということで、「知る」ということには、必ず知る対象があります。では、対象がない「知る」というのは、どういうことなのか？ あるいは、それはどうやって表現できるのか。そういうことが可能なのか、あるいは「知る」ということ、それによって何か知識が生まれ、その知識があるということは、はたしてどうい

うことなのか。あるいは、知識が捉^{とら}えているはずのものというものがあるのか、そういうものがあるというのは、どういうことなのか……。

そういったことを考えても、これはなにかに直接役に立つ知識にはなりません。役に立たないし、特定の対象や、確かに手をつかまえられるような対象はないのですが、しかし逆に言えば、あらゆる知識が成り立つもとを確かめたり、根柢^{こんぎ}を探るような働きともなるのです。

もう少し別の面から説明してみましょう。中学や高校の勉強は、いくつもの科目に分かれていて、それぞれの科目では、互いに領域の異なることを勉強しています。そのため、勉強したことは一見するとバラバラな知識ということになります。

例えば、数学で習う定義と、世界史で習う歴史の出来事とは、互いにバラバラです。中学、高校では、そういうふうにしてそれぞれ分け、対象がある知識を修得しているわけです。

しかし、習った知識は一見バラバラですが、それらの知識の断片を例えばセルロイドの板の上に撒まいてやるとどうでしょう。ひとつひとつの知識を鉄粉てつぷんだと仮定し、そのバラバラの鉄粉をセルロイド板の上に撒いてやるわけです。

鉄粉はバラバラですが、下から磁石を近づけるとどうなるか、そんな実験をしたことがあるでしょう。バラバラだった鉄粉はみごとに模様を描きます。規則正しい模様、あるいは今までバラバラだった鉄粉が、ある作用を受けて、ひとつの秩序ちゅうじょを描き出す。

鉄粉にそのような模様を描き出させるのは磁石ですが、その磁石の役割をはたすのが、簡単に言えば「考える力」というものなのです。考える力が、バラバラな知識を大きな模様に変えて、ひとつの世界を描き出す。

そのような「考える力」を磨みがくのが、言ってみれば哲学の役割です。

グローバルスタディーズというのも、歴史的な知識や政治的な知識、あるいは経済的な知識、法律的な知識、さらにもつと個人的な精神分析せいしんぶんせきの知識など、さまざまなものを集め、これがある磁力に感応させることで、ひとつの知の模様⑥を描き出そうとする試みです。そしてこのグローバル世界の中で、われわれはどういう条件のもとに生きているのか、ここで人生⑦が生きるということはどういうことなのかを総合的に考えるのが、グローバルスタディーズという学問なのです。

(西谷修『生き抜く力を身につける』より)

問一 —— 線①「哲学というのは見たところおもしろくないもの」(1行目)とありますが、筆者は哲学に対してこのような否定的な意見を持ちながら、肯定的な意見ももっています。それを表す5字をぬき出し答えなさい。

問二——線ア(2行目)とオ(13行目)「が」について、使い方の異なるものとして最適なものを1つ選び、記号で答えなさい。

問三——線②「現象」(7行目)とありますが、この熟語と同じ構成のものとして適当でないものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

- ア 登山 イ 読書 ウ 貯水 エ 飲料 オ 乗車

問四——線③「学問」(19行目)とありますが、筆者はどのようにして学問が成り立つと考えていますか。最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 本来、何か一つの出来事を「知る」ことおおわくで大枠が作られ始め、最終的には規則性のある各領域に分類されることで成り立つ。

イ 元々学問とは、世の中のあらゆる現象に対して共通する対象があり、それらを研究し比較ひかくすることで形成されていく。

ウ 基本的には、世の中の役に立つものをまとめ、研究者たちがそれぞれの領域に割り当てることことで成立する。

エ 本質的には、ある事象に対して「知る」という動作が働き展開され、対象領域が限定されることことで成立する。

オ 一般的には、どのような領域や事物、現象においても「知る」という過程を経れば、「学問」として認められ成り立つ。

問五



(28行目)とありますが、あてはまる語を次から1つ選び、記号で答えなさい。

- ア このように イ しかし ウ または エ では オ ところで

問六

——線④「これはなにかに直接役に立つ知識にはなりません」(38行目)とありますが、それはなぜですか。最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

- ア 哲学は知識をどうするかは、それを得たものの判断にゆだねられるため。
イ 哲学は奇特定の学問であり、何に使ってよいのか全く分からないため。
ウ 哲学は特定の対象を知ることができず、実学的ではないため。
エ 哲学は特定の対象をもたず、物事の根本を探究するものであるため。
オ 哲学は真偽を検証し、知識の根幹を探る営みであるため。

問七 —— 線⑤ 「バラバラの鉄粉」(48行目)に関する生徒A・B・Cのそれぞれの主張を読み、 I ・ II に入る言

葉を本文中からさがし、ぬき出し答えなさい。

生徒A 筆者は中学校や高校で勉強するそれぞれの科目について、僕たちが勉強していることは、一見するとバラバラな知識だと述べているね。この主張と「バラバラな鉄粉」はどのように関連しているんだろう。

生徒B その後に筆者はセルロイド板に鉄粉をまいて、下から磁石を近づけると規則正しい模様が見られると言っているね。おそらく筆者は、鉄粉 I で、磁石 II だと考えているんじゃないかな。

生徒C たしかに。そのように考えると、バラバラな I が、 II という磁石によって、規則正しい模様のような「ひとつの世界」を作り出すことにつながるんだね。

生徒A なるほどね。「バラバラな鉄粉」は、筆者が I を^{ひゆ}比喩した表現だったということか。じゃあ「ひとつの世界」ってなんだろう。これについて、新たにみんなで考えてみよう。

問八 —— 線⑥ 「ひとつの〴〵知の模様〴〵を描き出そうとする試み」(56～57目)とはどういうことですか。50字以内で説明しなさい。

問九 あなたの日常の中で哲学のように形をもたず、一見役に立たないが、実は必要なものについて具体例を挙げて、100字で説明しなさい。

